

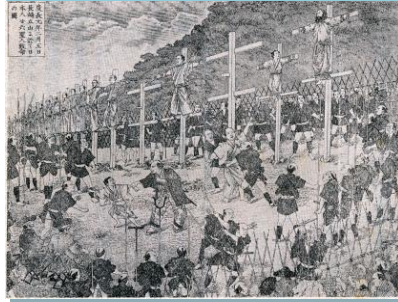
2月5日

日本の殉教者

日本二六聖人殉教者

(1597)

～日本で殉教した聖人たち～



「二六聖人の
殉教」

聖公会では「日本の殉教者」を祝うこの日に、カトリック教会では「日本二六聖人殉教者」を記念する。1549年にフランシスコ・ザビエルによってキリスト教が日本に入って来てから約半世紀後に起こったこの出来事を紹介したい。

その当時の将軍、豊臣秀吉は、最初はキリスト教に反対していなかったのだが、九州征伐の時にその態度を変える。1587年、宣教師追放令を發布し、宣教師を国外追放する。また、大坂・堺・京都の教会を次々と破壊し、その数は9年間で140にのぼったと言われる。

日本にはその頃、59人の司祭と97人の修道士がおり、日本人修道士も66人いた。また信者の数は15万人とも30万人とも言われている。

だが、1596年におこったサン・フェリペ号事件をきっかけに、秀吉は宣教師はおろか、信者をも全員死刑に処するという考えを持つ。この考えは石田光成によって改められたものの、京都・大坂にいたおもだった宣教師や信者を処刑する決断を下す。

当初処刑の対象に選ばれたのは、フランシスコ会宣教師6名(うちスペイン人4名、メキシコ人1名、インド/ポルトガル人1名)、日本人のイエズス会士3名、信者15名の計24名であった。

その中には12歳～14歳の少年3名も含まれた。

1597年1月3日、彼らは京都で左の耳たぶを切られ、京都市中を引き回される。そして1月4日に京都を出発し、1か月にわたって長崎まで、1200kmを歩く。その間、殉教者の世話をしていた信者2名も加わり、26名が長崎の西坂に到着する。

長崎奉行はせめて3人の子どもだけでも救いたいと考えたが、最年少のルドビコ・茨木は「この世のはかない命より、永遠の命を望みます」と答えたという。

彼らは1862年6月8日、教皇ピオ9世によって列聖される。(Y)

<特禱>

全能の神よ、あなたの慈しみと力とにより、わたしたちの国の殉教者たちは、苦難に打ち勝ち、死に至るまで忠実な生涯を送りました。今その人びとの生涯を記念し主のみ業を感謝するわたしたちも、この世においてあなたを忠実に証し、殉教者たちとともに命の冠を受けることができますように、父と聖霊とともに一体であって世々に生き支配しておられる主イエス・キリストによってお願いいたします。

アーメン